

さけます情報

か え つがるいし
さけの遡る川-2 津軽石川(岩手県)こまつ しんじ
小松 信治 (水産資源研究所さけます部門 資源増殖部 本州技術普及課)

津軽石川は岩手県東部に位置し、北上高地の鳥古ノ森 (850 m) 東麓に源を発し、豊間根川、大川を合流して宮古湾奥部に注ぐ、幹川流路延長 21.2 km、全流域面積 153.4 km² の 2 級河川になります (図 1)。別名鮭川と呼ばれ、南部鼻曲りサケの産地で知られ、住民は古くよりサケ資源を利用してきました。今回はその津軽石川の歴史について紹介したいと思います。



図 1. 津軽石川の位置図.

河川名の由来

津軽石川という名前は、青森県の津軽地方に由来しているようです。元亀・天正の頃、津軽地方の黒石 (青森県黒石市) の浅瀬石川にサケがたくさん遡上していて、そこから御神石を分けてゆず

り受けたところ、鮭の大群が来るようになり、やがて南部第一の鮭川漁場になったため、津軽から移した奇石の奇跡を徳として、それまでの丸長川から津軽の石の川、すなわち津軽石川と呼ばれるようになったと言われています (宮古市産業振興部観光課 2021)。

津軽石川と「又兵衛祭」

津軽石川の河川敷では毎年 11 月 30 日に、又兵衛祭という神事が開催されます (図 2)。この祭りは後藤又兵衛なる人物とサケ漁に関する伝説が元となっているようなのですが、その伝説自体も諸説あるようです。そのうちの一つは、サケを盗んで殺された後藤又兵衛と名乗る浪人の祟りによってサケがのぼらなくなったため、又兵衛をねんごろにお祀りしたところまたサケがのぼるようになった、というものです。別の説として、飢饉の年に藩がサケを独占するために川に設置した留めを村人のために壊し、津軽石川の河川敷で逆さ張りつけにされ処刑された後藤又兵衛という侍を弔うため、というものもあります (宮古市教育委員会移動博物館資料より)。又兵衛祭には、サケの霊、義民の鎮魂、異人殺し、豊漁祈願などの様々な意味が籠められているようで、地域の人々が津軽石川とサケに抱く思いが強く伝わってくる神事であることは確かです。



図 2. 又兵衛祭 (左) と、逆さ吊りの刑にされた又兵衛を模したわら人形 (右)。祭が終わるとわら人形だけが河川敷に立てられる。

津軽石ふ化場の沿革と資源状況

岩手県のサケ人工ふ化放流の歴史は、明治29年に宮古市鯉ヶ崎にあった水産補習学校（現宮古水産高校の前身）で採卵・放流を行ったのが最初と言われており、明治37年には岩手県初の人工ふ化場として津軽石村大字赤前字御蔵に「津軽石村鮭人工孵化場」が建設され、明治39年春には53万尾の稚魚が放流されました。その後、数回移転し、昭和8年現在地である津軽石字久保田に落ち着き、昭和12年には岩手県の水産試験場としてふ化事業が行われました。昭和25年から津軽石漁業協同組合が事業を行い、昭和43年組合合併により宮古漁業協同組合津軽石鮭鱒人工ふ化場と改称されました（岩手県さけ・ます増殖協会1985）。その後、飼育池の増設や浮上槽の導入を行い生産能力を高め、現在は飼育池148面（4,440m²）、用水量41t/分、生産計画4,980万尾を誇る全国でも有数の大規模ふ化場となっています（図3）。

サケ親魚の捕獲数では昭和55年に26万尾と本州で最も多い捕獲数を記録しており、平成の30年間の平均捕獲数も10万尾を超えるなど、沿岸漁業や地域住民への貢献は相当大きかったものと想像されます。

3.11 東日本大震災

あの、未曾有の大災害から10年以上が過ぎました。沿岸域は防潮堤が整備され、道路を走っていても車窓から海岸線を望めるところは少なく、ちょっと寂しい気持ちを抱きますが、住民の生命と財産を守ることを考えれば仕方がないことなのでしょう。

宮古湾最奥部から上流約2kmに位置する津軽石ふ化場も、津波の影響を受けました（図4）。地震発生から数分、町内の防災無線が津波発生を連呼する中、飼育用水としている地下水が濁ってき



図3. 津軽石ふ化場の全景.

ました。当時の職員であった佐々木啓氏（現場長）は、濁った飼育池から1尾でも多くの稚魚を守ろうと降下防止網を撤去し稚魚の放流を行っていました。当時から防潮堤があり、津波を超えることはないと思っていましたが、それを乗り越えて真っ黒い波のカーテンが押し寄せてくるのを見て、一目散で裏山を駆け上がったとのこと。当時の場長であった萬直紀氏は盛岡市内で会議中でしたが、大急ぎで宮古市に戻るも、ふ化場へ近寄ることは出来ませんでした。停電により稼働していた自家発電機のエンジン音を川向うの高台から聞く以外、なす術がありませんでしたが、ふ化場職員は全員無事との情報が寄せられ安堵したとのこと。

復旧には相当の時間を要することを覚悟していたようですが、その年の秋にもサケは回帰してくるので、施設の復旧整備と並行して種卵確保に奮闘したそうです。幸いにも三つある井戸のうち二つがぎりぎり冠水を免れ、冠水により塩水が混入した井戸も夏場に大型発電機で井戸内の排水を念入りに行ったため、秋には用水の確保は整いまし



図4. 東日本大震災直後（左）と復旧後（右）の津軽石ふ化場。（撮影：瀬川格氏）。

た。浮上槽や飼育池が整備途中のなか、先の事を心配してもどうしようもないとの思いでふ化事業に取り組み、結果的にほぼ計画通りの4,980万尾の稚魚を生産したとのことで、本当に頭が下がる思いです。

おわりに（近年の不漁と将来に向けて）

津軽石川では令和に入り極端に資源（捕獲数）が減少し、昭和40年始めの頃と同じくらいの捕獲数となっています（図5）。これは津軽石川に限ったことではなく、本州の太平洋側全体が同じように減少している状況です。この様に広範囲で同様に資源が減少した原因については、放流された稚魚が生息する沿岸の環境が成育に不適になっていることが指摘されていますが、明確に減耗の要因を解明するには至っていません。まずは減耗要因の解明を行い、減耗を回避する方法を見つけていかなくてはなりません。津軽石川のみならず、

本州太平洋側のサケ資源を今後も利用できるよう、我々水産資源研究所さけます部門も県行政や試験研究機関と連携、協力し、増殖団体と一丸となって資源復活のための取り組みを進めていく所存です。

最後になりますが、本稿の執筆に当たりご助言頂いた津軽石ふ化場の佐々木場長、萬元場長、写真やデータを提供して頂いた、津軽石さけ繁殖保護組合、岩手県さけ・ます増殖協会に感謝いたします。

引用文献

岩手県さけ・ます増殖協会. 1985. 津軽石さけますふ化場. 岩手県のさけ・ますふ化場, 盛岡. pp 87-92.

宮古市産業振興部観光課. 2021. 津軽石川. URL: https://www.city.miyako.iwate.jp/kanko/tsugaru_isikawa.html, (参照 2021-11-20).

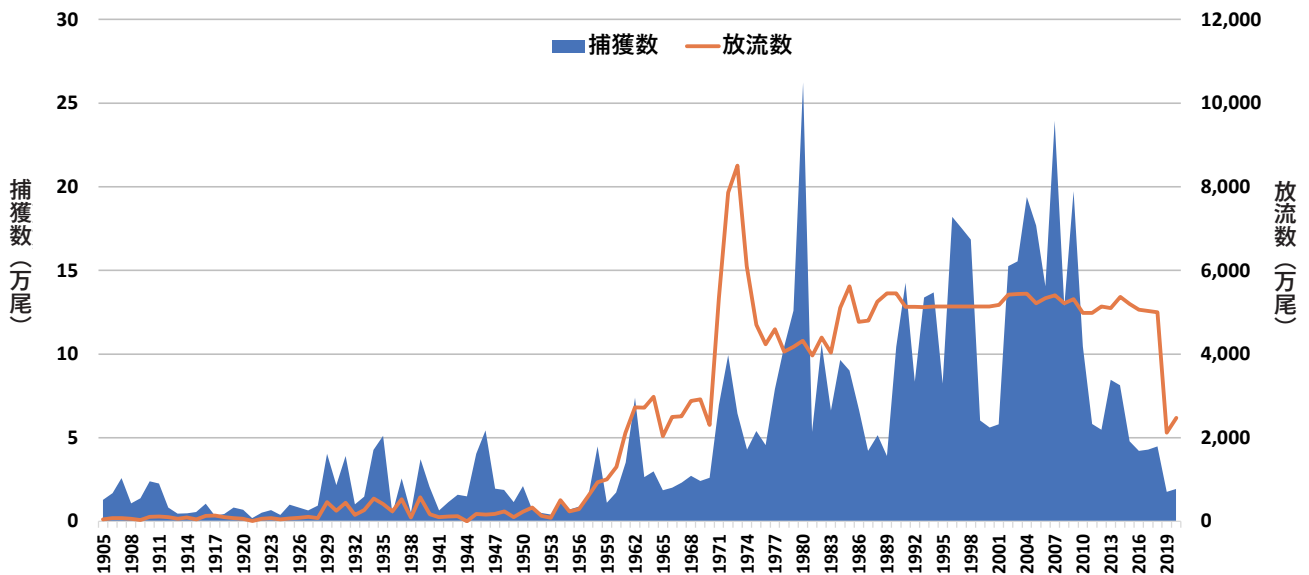


図5. 津軽石川のサケの捕獲数と放流数の推移. 1905(明治38)年~2020(令和2)年. データ出典: 岩手県さけ・ます増殖協会.